

新・農・業・人

この人この経営



今年、飯館村に三世代で住む新居が建つ。「妻、両親、3人の子どもたちと楽しく暮らしていきます」

避難指示解除の村に
若い繁殖牛経営者が戻る
夢に描く和牛の村づくり

被災地に牛の鳴き声

「生まれ育ったこの飯館村^{いいたてむら}で、再び、牛を飼えることがうれしい」

山田豊さん（38歳）は喜びを満面の笑みで表した。

2017年6月より父の猛史さん（72歳）とともに、被災地の飯館村松塚地区で、水田を利用して広大な採草放牧地をつくり、放牧による肉用牛繁殖経営に取り組んでいる。山田さん親子はこの方法を「水田放牧」と呼び、水田放牧を村内に拡げることこそが、村の基幹産業であった畜産振興と農地を荒廃から守り活用する切り札になると主張する。

阿武隈山地の中腹に位置する典型的な中山間地域である飯館村は、東京電力福島第一原子力発電所事故によって甚大な被害を受けた。放射線量の高さから村は「計画的避難区域」に指定され、全住民は村外避難を余儀なくされた。

震災前、村の基幹産業の一つは畜産で、1958戸、6509人の人口のうち286戸が畜産を営んでいた（2011年2月末）。

肉用牛繁殖が211戸と一番多く、酪農や肥育も27戸あった。肥育では地域ブランド「飯館牛^{いいたてあまぎ}」が、全

国にその名を轟かせていた。しかし、村民の避難にあたり畜産農家の97%が廃業した。飼育されていた約3000頭の牛は、そのほとんどが競売に掛けられ処分された。避難指示が解除（一部地区を除く）されたのは6年後の17年4月だ。

牛に向き合う二人

2005年、東京農業大学を卒業後、山田さんは自家に就農した。都会に出たことから、自然あふれる飯館村のすばらしさがわかったという。小学校の登下校時には小川のなかを通学路にして歩いたことなどを楽しそうに話す。

農業に抵抗感を持っていなかったことも理由だと言う。「ばっち子（末っ子）で家族にかわいがられました。家業を手伝うとみんなから褒められたのも大きかったかな。幼い頃、飯館村にも機械化の波が来ていて、農作業はそれほど大変とは感じませんでした」

家業は、葉タバコを中心に繁殖や水田を営んでいた。山田さんは父に教えてもらいながら徐々に経営に参画していった。

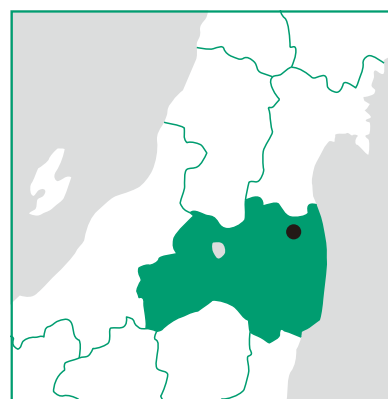
震災の村外避難をきっかけに、親子は離れ、それぞれの視点を持つて牛と向き合った。

株式会社ゆーとぴあ

代表取締役 山田 豊

新・農業人 この人この経営

設立 ●2020年11月
所在地 ●福島県飯舘村、福島市飯野町
経営規模 ●繁殖牛70頭。うち、飯舘村に50頭(成牛55頭、育成牛15頭)
事業内容 ●肉用牛(繁殖)
労働力 ●本人、妻、父



山田さんは、京都の精肉店に就職した。震災直前の2月、ニュージーランドの畜産農家を視察して感銘を受け、肉用牛を追究することを決めていた。「牛への情熱が満ち溢れていました。牛の生産は経験した。ならば食肉という商品として牛を見てみたいと思ったのです」と当時を振り返る。

父は、いったんは廃業も考えたが、息子が精肉店に就職したことで、俄然、和牛復活に奮い立った。「メス牛を売りに行ったのに、逆に買って帰ってきた。わが親ながら、なんて前向きな人なんだって感心しました」と笑う。父は、10頭のメス牛を連れて中島村に避難。その後、福島市飯野町の山間に牛舎を建て、38頭規模まで飼養頭数を増やした。水田放牧の構想は、11年ごろから父が描き始めた。地区の復興部

長として、避難指示解除後に村民が帰還できる道を模索していた。除染したとはいえ、風評被害を考えると水田は無理だろうとする村民が大多数を占めるなか、農地を農地として次代へつなぐことこそが復興に直結すると考えた。

耕作しなくなった水田に牛の堆肥をすきこむことで地力が回復し、村民が帰村したときすぐに農地として利用できる。そのため、除染土の置き場を水田から離れた場所にある共用地にした。

16年1月、父の構想に賛同した山田さんは精肉店を退職し福島県に戻った。「常々、農地のバトンを渡すのが自分の仕事だと父は話しています。ならば受け取るのが、私の役目です」

二人は除染が終わった山田家の水田をつかい放牧試験地づくりに

着手した。除染作業の対象外である畔は小型ショベルカーを使い表土を撤去し、水田をつないで2畝の採草放牧地をつくり5種類の牧草をまいた。「ぬかるみがひどくて機械が入れず、種まきは人力。20キの動噴を背負って何度も往復しました。はじめは避難前を思い出し悲しかったのですが、種まきを終えるころには、以前と同じ農業ができなくてもここでやっていくんだと奮起しました」。そして17年6月、福島市飯野町の牛舎から牛を3頭連れ帰り、青々と牧草の茂る試験地に放牧した。

新ブランドを模索

水田放牧は、農地保全以外に、経営的なメリットがある。広い面積で放牧するため、ストレスなくのびのびと牛を飼育できることだ。運動量も増えるためお産が軽くなるという。

また、自前で牧草を生産することと、粗飼料の購入経費が削減できる。今後、村内で50畝の耕作放棄地の水田を借り採草牧草地とする。いまは、全体で繁殖メス牛70頭の規模だが、避難先の福島市飯野町から飯舘村に徐々に牛を移動させ、数年の間には100頭規模への拡

大をめざす。

牛を取り巻く畜舎、敷料や、口にする水、牧草などは定期的に国が定める放射線量検査を受けている。またメス牛については出荷時に検査、食肉処理後の枝肉でも検査がおこなわれる。「基準値を超える数値は出ていません。国や県の協力も得ながら、責任感を持って安全な牛をつくっています」と山田さん。

今後の大きな目標は、村全体で「飯舘牛」に代わる新ブランドを立ち上げることだ。まずは、帰村した繁殖農家11戸で協力して、繁殖をリタイアする経産牛を水、餌など肥育牛と同じ条件で仕上げ、ブランド化し販売したいと考えている。「精肉店ではどんな肉が好まれるかを学びました。この経験が生かせると考えています。血統だけを重視することなく、餌など環境で付加価値を付けたい」と意気込む。

避難指示解除から4年。飯舘村には帰村者以外に100人を超えるイターン移住がある。山田さんに村の復興について聞いた。帰村者も移住者も一丸となって知恵を出し合い、工夫し、強い産地をめざします。そして和牛の村を新生します。力強い答えが返ってきた。

(情報企画部 城間綾子)